

奄美大島における学校環境観察実習の歩み

— 20年目を迎えて —

山元卓也 [鹿児島大学教育学系 (教職大学院)]

錦織 寿 [鹿児島大学教育学系 (理科教育)]

金 娟 鏡 [鹿児島大学教育学系 (家政教育)]

History of school environmental fieldwork on Amami Oshima

YAMAMOTO Tatsuya · NISHIKORI Hisashi · KIM Yeonkyeong

キーワード：学校環境観察実習，奄美大島，離島・へき地，小規模校，複式学級

1. はじめに

本県は南北に約 600 km と長く、南方の島嶼部を中心に 27 の有人離島を有している。このような地理的条件にある本学部の学生の中には、鹿児島県出身者であっても離島に行った経験がなく、将来教師としての離島赴任に不安を抱く者も多い。一方、在籍中に学部のゼミや卒業論文研究、また個人の旅行等で離島へ行った学生は、離島の環境を体験することにより離島の状況を知るとともに、その良さに気づき、赴任への不安が軽減される傾向にある。こうした現状を受け、教師を目指す学生が奄美大島の実習校及び少年自然の家での学習・生活体験を通して、教職員や児童・生徒と触れ合うことで、離島を少しでも肌で感じることができるよう、平成 9 年度から学校環境観察実習を開始した。

本実習は、昨年度（平成 28 年度）で 20 回目となり、昨年度は学校環境観察実習委員会のメンバーとして学生を引率した。奄美大島での体験活動を通して、学生が離島・へき地における小規模校に対する関心を喚起し、自らの学ぶ意欲・内的動機を高め、その後の講義や実習において効果的な学びが持続していることを実感した。本稿では、これまでの取組を振り返りつつ、学生にとって学校環境観察実習がどのような意識変容につながっていったのかを含め、その結果を述べてみたい。

2. 学校環境観察実習の流れ

学生の活動としては、主に事前のオリエンテーション、各学校での実習や奄美少年自然の集団生活体験・活動プログラム、事後の報告会となっている。また、平成 26、28 年度は、地域の伝統行事にも参加している。

- ・平成 26 年度 秋名アラセツ行事「ショチョガマ」に参加
- ・平成 28 年度 佐仁アラセツ行事「八月踊り」に参加（写真 1）



写真 1 平成 28 年度「八月踊り」

事前指導や実習の講義としての位置付けやそれに伴う内容に変更はあるが、基本的な流れはこれまで大きく変わっていない（表 1）。具体的な内容については平成 28 年度の実績を例に以下に示す。

① 受講生募集 (4月下旬～5月12日)

4月の教育学部教授会において、平成28年度学校環境観察実習運営委員会が承認され3名の教員が委員となり、4月下旬から図1のとおり募集の掲示を行い、5月10日～12日の期間で募集受付を行ったところ61名も応募があった。定員が40名のため、辞退者を見込んで45名(男子15名、女子30名)に受講を許可する。(辞退者は出ず、45名全員が実習に参加)

表1 これまでの取組の流れ

平成15年度	～	平成21年度	平成22年度	～	平成28年度
受講生募集					
企画運営協議会					
講義1：オリエンテーション 奄美大島での実習			講義1：第1回オリエンテーション 第2回オリエンテーション 奄美大島での実習		
講義2：シンポジウム			講義2：報告会		
研究協議会					

② 企画運営協議会 (6月28日)

実習地の奄美市で受入関係機関(教育事務所、教育委員会、奄美少年自然の家、各学校)と大学側の代表が集まり、実習の趣旨、概要及び計画について共通理解を図り、打合せを行った。また、関係機関並びに受入校の下見も行い、計画しているタイムスケジュールの確認も行った。

③ 第1回オリエンテーション (7月11日)

引率教員、担当事務職員の紹介と実習の趣旨、概要、日程等についての説明を行い、活動毎の役割分担や班編制(宿泊班、野外炊飯班、実習校別班)を行った。事前調査として、緊急連絡先一覧作成、食物アレルギー調査、奄美少年自然の家でのクラフト活動希望調査を行った。欠席者2名に対しては、7月15日に補講を行った。特に実習に対する目標設定と実習終了後のレポート提出については入念な指導を行った。

④ 第2回オリエンテーション (8月26日)

出発日の集合場所・時間、日程、持参物等の最終確認とフェリー内、実習校、自然の家での過ごし方についての説明と指導を行った。また、実習後の見通しを持たせるために、事後アンケート、レポート、報告会についての説明も行った。欠席者4名に対しては、9月2日に補講を行った。

⑤ 奄美での観察実習及び離島体験 (9月5日～11日)

5日夕方に鹿児島新港を出発し、船中にて1泊。翌日に奄美少年自然の家での研修メニュー(入所式、講話、野外炊飯)を実施。2日間にわたり、奄美市の小規模校3校、瀬戸内町の小規模校3校に分散訪問し、体験活動を実施。最終日に奄美少年自然の家での研修メニュー(クラフト活動、海洋・海浜活動)を実施。台風接近により、9日帰還の予定が1日延泊となった。一昨年度までは、

学校環境観察実習の受講生募集のお知らせ

「学校環境観察実習」(集中講義)

本実習は、鹿児島での学校教育や社会教育について体験を通して学ぶもので、「さまざまな出会いを通じて一歩り成長できた」「教師になる決意が固まった」等、過去19年間の参加者に大変好評でした。

対象： 原則として、教育学部の2年生(定員40名)

日程： 平成28年9月5日(月)～9月10日(土)

内容： 奄美大島における6日間の実習(奄美市・瀬戸内町の小学校、奄美少年自然の家等における体験学習)

9/5	月	鹿児島新港集合(16時30分)、鹿児島新港出発(18時)	【船中泊】
9/6	火	名瀬港到着(5時)、自然の家の入所、野外炊飯	【自然の家泊】
9/7	水	奄美市の小学校における体験学習	【自然の家泊】
9/8	木	瀬戸内町の小学校における体験学習	【自然の家泊】
9/9	金	いっただいめ、鹿児島空港、自然の家退所、名瀬港出発(21時20分)	【船中泊】
9/10	土	鹿児島新港到着(8時30分)、解散	

単位： 1単位(自由単位)

参加費用： 23,000円程度(鹿児島～名瀬間のフェリー代(第3乗り)、自然の家の宿泊・食費代(実費)) ※8月に徴収。教育学部協議会費納入者に対しては補助あり。

受付期間： 5/10(火)～5/12(木)17:00迄(学生係窓口)

参加者決定： 6/3(金) メール及び掲示板(申込多数の場合、抽選)

※受講生は、以下の講義を受講する必要があります。欠席者は辞退扱いになります。

講義1： 第1回オリエンテーション(7月中旬予定)
第2回オリエンテーション(8月下旬予定)

講義2： 報告会(10月予定)

大島教育事務所、奄美市・瀬戸内町教育委員会、奄美市・瀬戸内町の小学校、奄美少年自然の家の先方の参加を募って、大学構内で報告会を行います。

※「平成27年度学校環境観察実習報告書」を教育学部学生係で配付中です。

図1 平成28年度募集の掲示

台風等の気象条件により実施が危ぶまれることがありながらも、全て予定通り実施できていたが、昨年度は20年目にして初めて予定を変更したケースとなった。

⑥ 学校環境観察実習報告会（10月5日）

受入校の管理職の方の参加を得て、7つのグループによる報告会を実施。各学校での体験を通して学んだこと、感じたこと、今後の課題等についてスライド資料を用いて発表した。受入校の管理職の方から講評をいただいた。

⑦ 学校環境観察実習研究協議会（12月15日）

実習地の奄美市で受入関係機関（教育事務所、教育委員会、奄美少年自然の家、各学校）と大学側の代表が集まり、平成28年度実習の経過報告と受講生の事後アンケートの結果報告をもとに、本実習に対する意見、要望等を協議した。また、次年度についての意見交換、参会者からの所感等が表明された。

3. これまでの経過

この実習の始まりは、平成9年、文部科学省（旧文部省）により全国の教員養成系大学・学部を対象に「種々の体験活動を通して、学生が子どもたちと触れ合い、子どもの気持ちや行動を理解し、実践的指導力の基礎を身につける」ことを目的として「教員養成学部フレンドシップ事業」が導入されたことによるものである。本事業の開始当時、鹿児島大学教育学部では教育免許法上の必修科目である教育実習以外には、大学と市町村教育委員会との連携協力による学校現場を体験する機会はほとんどなかった。そこで、大学入学後の早い段階に鹿児島県独特の離島における学校環境を体験することが、教職を志す学生にとって、後の大学生活をより有意義にさせると考え、選択科目として6日間の奄美大島での体験学習を開始した。「教師を目指す」という動機を高める観点から、大学入学後の早い時期に学校現場を体験することで、教職員の仕事を身近に理解し、教師としての立場で子どもと触れ合うことにより、子どもの行動や気持ちを理解するにはどうしたら良いかを常に考えながら大学で学ぶことが、質の高い教師の育成に資することができると考え、1年次の学生を対象として、継続して実施してきた。

平成19年度に実践と理論の往還を目指した学部カリキュラム改革の一環として、鹿児島市内の小中学校での学校体験活動を学校教育教員養成課程と特別支援教育教員養成課程の1年次に必修科目の「教職基礎研究」として新たに開設したことから、本実習は離島の小規模校での学校体験に焦点化するとともに、他の実践科目との連携も視野に入れ、平成21年度から対象学年を2年次に変更した。このように事業開始以来、対象年次や科目名などの変更を経つつ、20年間絶えず実施してきている。事業の主な経過については以下のとおりである。

平成9年（1997） 教員養成フレンドシップ事業創設

科目名「生涯教育実習」、対象は教育学部1年生（定員60名）

有志教員が運営（引率）を担当

10月上旬の1週間を利用して奄美大島での体験学習を開始

平成13年(2001)	科目名を「学校環境観察実習」に変更
平成15年(2003)	実習時期を「9月下旬から10月上旬にかけて」に変更
平成16年(2004)	大学の法人化に伴い、予算は前年度実績に基づき配分 学部長指名による運営委員会を組織して運営(引率)開始
平成18年(2006)	実習時期を「9月下旬」に変更 (6泊7日 ※船中泊を含む)
平成20年(2008)	実習時期を「9月上旬」に変更 (5泊6日 ※船中泊を含む)
平成21年(2009)	「実践的教職科目群」の導入、整備により教職基礎研究(学校体験)を新設 これに伴い「学校環境観察実習」の対象を教育学部2年生対象に変更

表2は、各年度の実施日、実習校、参加学生数についてまとめたものである。参加学生の決定については、平成18年度までは先着順としており、平成19年度以降は抽選を行っているため、平成18年度以前の表中の希望者数は空白としている。また、募集定員については、平成20年度までは60名、平成21年度からは40名としている。参加学生が募集定員に満たない年度があるのは、抽選後にやむを得ない事由で辞退があったためである。平成21年度の参加・希望者数が少ないのは、対象学年が1年生から2年生に変化されたことにより、前年度と対象学年が重複しているためである。2回目の実習参加を希望する学生も多くいたが、絶対数としては少なく、例外的に3年次の教育実習と重複しない4年生にも募集を行った。

表2 実習校と参加学生数

実施日	実習校	参加学生数	
		希望者数	
平成9年(1997)	(名瀬市)名瀬小学校,名瀬中学校 (瀬戸内町)油井小中学校,久慈小中学校		
平成10年(1998)	10月3日～ 10月9日	(名瀬市)名瀬小学校,名瀬中学校 (瀬戸内町)篠川小中学校,久慈小中学校	56
平成11年(1999)	10月3日～ 10月9日	(名瀬市)名瀬小学校,名瀬中学校 (瀬戸内町)諸鈍小中学校,俵小学校,俵中学校	61
平成12年(2000)	10月1日～ 10月7日	(名瀬市)名瀬小学校,名瀬中学校 (瀬戸内町)諸鈍小中学校,俵小学校,俵中学校	60
平成13年(2001)	9月30日～ 10月6日	(名瀬市)名瀬小学校,名瀬中学校,小宿中学校,朝日中学校 (瀬戸内町)諸鈍小中学校,俵小学校,俵中学校	50
平成14年(2002)	9月29日～ 10月5日	(名瀬市)名瀬小学校,奄美小学校,金久中学校,朝日中学校 (瀬戸内町)俵小学校,俵中学校,伊子茂小中学校	60
平成15年(2003)	9月28日～ 10月4日	(名瀬市)朝日小学校,奄美小学校,朝日中学校,金久中学校 (瀬戸内町)伊子茂小中学校,薩川小学校,薩川中学校	60
平成16年(2004)	9月26日～	(名瀬市)朝日小学校,奄美小学校,朝日中学校,金久中学校	60

	10月2日	(瀬戸内町)押角小中学校, 薩川小学校, 薩川中学校	
平成17年(2005)	9月25日～ 10月1日	(名瀬市)朝日小学校, 小宿小学校, 小宿中学校, 名瀬中学校 (瀬戸内町)押角小中学校, 俵小学校, 俵中学校	60
平成18年(2006)	9月24日～ 9月30日	(奄美市)伊津部小学校, 小宿小学校, 小宿中学校, 名瀬中学校 (瀬戸内町)嘉鉄小学校, 俵小学校, 俵中学校	60
平成19年(2007)	9月9日～ 9月15日	(奄美市)伊津部小学校, 小宿小学校, 小宿中学校, 名瀬中学校 (瀬戸内町)嘉鉄小学校, 薩川中学校	60 75
平成20年(2008)	9月7日～ 9月12日	(奄美市)知根小学校, 大川小中学校, 崎原小中学校 (瀬戸内町)薩川小学校, 篠川小中学校, 油井小中学校	59 67
平成21年(2009)	9月6日～ 9月11日	(奄美市)知根小学校, 大川小中学校, 芦花部小中学校 (瀬戸内町)嘉鉄小学校, 俵小学校, 俵中学校	25 25
平成22年(2010)	9月5日～ 9月10日	(奄美市)知根小学校, 小湊小学校, 芦花部小中学校 (瀬戸内町)嘉鉄小学校, 俵小学校, 俵中学校	34 57
平成23年(2011)	9月4日～ 9月9日	(奄美市)崎原小中学校, 小湊小学校, 芦花部小中学校 (瀬戸内町)嘉鉄小学校, 俵小学校, 俵中学校	34 43
平成24年(2012)	9月4日～ 9月9日	(奄美市)崎原小中学校, 小湊小学校, 大川小中学校 (瀬戸内町)油井小中学校, 俵小学校, 俵中学校	40 52
平成25年(2013)	9月2日～ 9月7日	(奄美市)崎原小中学校, 佐仁小学校, 大川小中学校 (瀬戸内町)嘉鉄小学校, 薩川中学校, 俵中学校	39 46
平成26年(2014)	9月1日～ 9月6日	(奄美市)知根小学校, 手花部小学校, 大川小中学校 (瀬戸内町)嘉鉄小学校, 阿木名小中学校, 諸鈍小中学校	36 41
平成27年(2015)	8月31日～ 9月5日	(奄美市)小湊小学校, 佐仁小学校, 大川小中学校 (瀬戸内町)薩川小学校, 篠川小中学校, 伊子茂小中学校	43 48
平成28年(2016)	9月5日～ 9月11日	(奄美市)知根小学校, 佐仁小学校, 手花部小学校 (瀬戸内町)阿木名小中学校, 諸鈍小中学校, 俵中学校	45 61

これまでの実習校は28校であるが、現在は廃校、休校となっている学校もある(表3)。平成19年度までは、島内でも比較的生徒数の多い学校が実習校となっているが、平成20年度以降は、複式学級のある小規模校での実習となっている。奄美大島本島の最北端の校区にある佐仁小学校には、平成25年度から実習に赴いており、宿泊地としている奄美少年自然の家からバスの移動で1時間程要するところにある。また、瀬戸内町の加計呂麻島にある学校については、平成11年度から実習に赴いており、宿泊地からバスと船の移動で1時間30分程要するところにある(図2)。宿泊地を7時の出発となることから少々学生への負担はあるが、奄美大島本島全領域に渡っての移動によって地理的な環境観察が可能になる点において、効果的な実習ができていると感じる。

表3 平成29年度 各学校の児童生徒数

	学校名	児童数	生徒数
1	名瀬小学校	390	—
2	奄美小学校	477	—
3	伊津部小学校	215	—
4	朝日小学校	651	—
5	小宿小学校	350	—
6	知根小学校	10	—
7	大川小中学校	38	20
8	小湊小学校	20	—
9	崎原小中学校	10	11
10	芦花部小中学校	23	16
11	手花部小学校	9	—
12	佐仁小学校	12	—
13	久慈小中学校	休校	
14	篠川小中学校	休校	

	学校名	児童数	生徒数
15	薩川小学校	7	—
16	俵小学校	休校	
17	諸鈍小中学校	13	2
18	伊子茂小中学校	11	休校
19	阿木名小中学校	49	27
20	油井小中学校	13	2
21	嘉鉄小学校	5	—
22	名瀬中学校	223	
23	金久中学校	328	
24	朝日中学校	331	
25	小宿中学校	173	
26	薩川中学校	休校	
27	俵中学校	5	
28	押角小中学校	廃校	

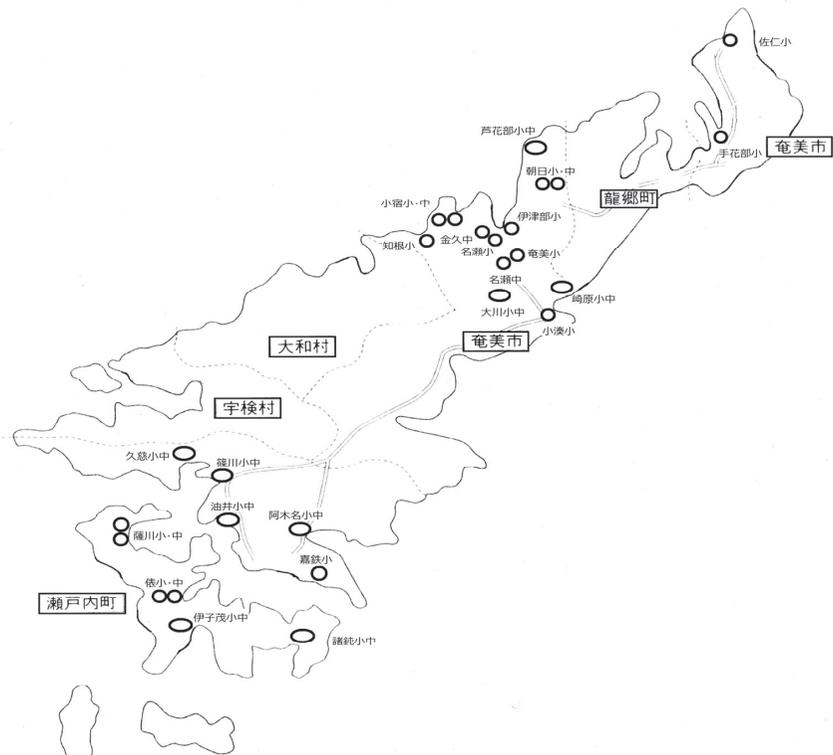


図2 実習校分布図

4. 受講生の実態

表4は、平成22年度以降における受講生の離島での活動経験と実習参加前後の意識の変化に関するアンケート結果である。本実習の対象学年が2年生となったのは、平成21年度からであるが、平成21年度は前年度の実習に参加した2回目の学生が多数含まれていたため、表4のアンケート結果からは除外し、平成22年度以降のアンケートを調査対象としている。

表4 離島活動経験の有無と参加前後の意識の変化についてのアンケート結果

	離島活動経験	参加前と参加後での意識の変化			
	ない	かなり変化した	少し変化した	あまり変化していない	変化しなかった
平成22年度	15 (44.1%)	21 (67.7%)	10 (32.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
平成23年度	22 (64.7%)	29 (72.5%)	11 (27.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
平成24年度	23 (57.5%)	22 (64.7%)	11 (32.4%)	1 (2.9%)	0 (0.0%)
平成25年度	18 (46.2%)	22 (62.9%)	13 (37.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
平成26年度	22 (61.1%)	24 (68.6%)	11 (31.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
平成27年度	17 (39.5%)	31 (72.1%)	11 (25.6%)	1 (2.3%)	0 (0.0%)
平成28年度	23 (51.1%)	36 (80.0%)	9 (20.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

参加学生の実習前における離島での活動経験については、約半数の学生が経験のないことが分かる。鹿児島県内外を問わず、離島の環境での生活体験は少なく、その末体験からくる関心とへき地教育、複式学級への関心による受講希望者が多いようである。また、実習参加前後での意識の変化については、離島での活動経験の有無に関わらず受講者ほぼ全員が意識の変化があったと回答している。離島での活動経験があると回答した学生にも意識の変化をもたらしていることから本実習の意義を確認できたと言える。どのようなところで意識の変化を感じたかを具体的に尋ねたところ以下のような回答が得られた。分類については、筆者によるものである。なお回答の記述については一部修正を加えている。

進路についての意識

- ・さらに教師になりたいという気持ちが強まった。
- ・教えるということの素晴らしさを知ることができ、教師になることを少し固め始めている自分がある。
- ・教師像がなんとなくできてきた。教師になろうと決意できた。
- ・中学・高校の免許を取るつもりでいたが、小学校の教員にもとてもあこがれるようになった。
- ・新しく理解できたことや、これからの課題を見つけられ、充実感を得られた。一方で、自分は教師に向いているのかと不安にもなった。
- ・教師への憧れが強くなるとともに、不安も大きくなった。

教育に関する関心

- ・実際に学校を訪問し、学校が抱える課題について話を聞くことで、教育に対する興味が高まった。
- ・鹿児島県内の教育について一層関心を持った。
- ・言葉が違ってても、教育、子どもへの向き合い方は同じ、教育の本質は変わらないということに気付かされた点において、自分にとって大きな変化だった。

- ・離島における小規模校での教育は、理想的な授業の原点であると考えられるようになった。

離島教育・複式学級・小規模校への関心

- ・小規模校や複式についてのイメージがマイナスからプラスに変わった。
- ・離島での教育はいろいろ不便があるのではないかと不安に思っていたが、今回の実習を通して島の良さを学び、離島教育に興味を持った。
- ・離島の教育を直に見たことがなかったが、児童の様子や先生方の取り組んでいる工夫や意識を観察して、自分が教員になって離島に赴任した時に、どうしていったら良いか、どういう教師になっていきたいか深く考えることができた。
- ・自分の中での複式学級や小中併設校に対する知識が、実体験を通じたものになったことで、それらのメリットやデメリット、それに応じた学校側の策をより具体的に考えられるようになったと思う。
- ・離島だから…、小規模校だから…、という偏見が自分の中にあっただことに気付いた。
- ・多人数での教育の仕方と少人数での教育の仕方の違いを知って、どうすれば少人数の複式学級はもっとスムーズにいくのか等を意識するようになった。

協働的な学び

- ・教職を目指す身として、子どもと一日だけでも共にすること、そしてそこで学んだものをみんなと話すことで、様々な見方ができるようになったと思う。43人の仲間からの影響がとても大きかった。
- ・離島教育の現実を知ることができ、また友達も増え、人間性が豊かになった気がする。
- ・小規模校のよさ、課題を実際に見ることができ、それを皆で討論し、意識を高めることができた。

これからの学び

- ・子どもの学びをより良いものにするために、教師も工夫し考え続けることが大切だと思ったので学びの工夫を考えながら生活していきたいと思うようになった。
- ・コミュニケーション能力や一般教養、専門性など大学でもっと力をつけたいと思った。
- ・教員になりたい気持ちが強くなった。日々の講義をもっと一生懸命に受けようと思った。

本学部では、1年次に教職基礎研究で3日間の学校体験を実施している。この体験では、初めて教師の立場で学校を参観し、教職への具体的なイメージを持たせることを学修目標の1つとしている。この体験をもとに、さらに教育学部開設の授業、特に実践的科目群の選択科目を以前より多く受講した状況で本実習に参加していることから、以前よりも学校教育及び離島教育、へき地教育等について高い意識を持って実習に臨んでいるのではないかとと思われる。意識の変化の記述を見ると、離島環境や小規模校への純粋な驚きだけでなく、教育内容や大規模校（鹿児島市内の学校）との比較など具体的な内容が多かった。また、不安が解消された学生がいる一方で、不安を抱く学生も少なからず見られた。これからの自己課題を具体的に捉えることができた現れではないかと考えられる。そのため、今後、学部の授業において、個別の課題に対応して将来の不安を解消できるようなカリキュラムの整備が必要である。これからの教師に求められる資質能力の1つとして、平成27年12月の中央教育審議会答申では、「チーム学校」の考えの下、多様な専門性を持つ人材と効果的に連携・分担し、組織的・協働的に諸課題の解決に取り組む力を示している。当然、今の学生にこの力を身に付けさせるには課題も多いが、上記の回答にもあるように、協働して課題を解決す

ることの良さを感じている学生もいる。このことは、教育的内容を学ぶ以上に大きな成果ではないかと考える。

5. 今後の展開について

これまで述べてきたように、奄美大島での観察・体験実習はとても意義深い事業ではあるが、今後に向けて解決すべき課題や要望がいくつか挙げられているので以下に紹介する。

大きな課題としては、実習校から継続的に提起されている実習時期についてである。現在の実習時期は9月第2週の5泊6日（船中泊を含む）に固定されている。「3. これまでの経過」の中で実習時期の変遷が記されているが、事業の開始当初は9月下旬から10月上旬にかけて実施されていた。その後、大学の後期授業日程の変更（授業日数確保のための授業開始日の前倒し）や、附属学校の学期変更にもともなう教育実習期間（2年次の参加観察実習）の日程変更等により現在の日程に変更されている。しかし、実習校においては2学期開始直後の非常に多忙な時期に観察実習が行われるため、変更直後から時期の見直しについて要望が出されていた。現在の附属学校（2校）および市内の代用附属学校（2校）で行われる2年次の参加観察実習の計画では、9月第2週のみがこの観察実習を組むことのできる日程となっており、受け入れ先の学校には現状を御理解いただいた上で引受けていただいているのが現状である。

次に要望として挙げられているのは、この学校環境観察実習の拡大・充実化についてである。本実習については、受け入れ先の学校・諸機関においても高く評価していただいているが、各学校での体験が1日だけでは奄美大島における小規模校の実態を把握するためには短く、もう少し期間を伸ばせないかとの意見をいただいている。非常にありがたい申し出ではあるが、先の教育実習の期間や学部の後期授業との関係から現時点での実施は困難な状況である。一方、鹿児島大学では、全国的な取り組みとして行われている学期制の弾力的運用によりターム制（4学期制：従来の前・後期を2分割し、集中的に授業を行う制度）を導入している学部もあり、教育学部において導入されることになれば講義の無い期間を設けて各種の教育実習に充てることが可能となる。今後行われる新学習指導要領に対応する教職課程再課程認定において、教育学部のカリキュラムについても変更が行われることから、現在鹿児島市および市周辺の自治体で行われている各種のボランティア活動等の取扱いも含めて議論していけるのではないかと考えている。

教育学部の実施体制についても、20年目の節目の年を終えて大きな変更が行われた。これまで毎年学部長に指名された3～4名の教員と事務職員（学生係）をもって運営委員会を組織し引率を行ってきた。原則的に運営委員となる教員は観察実習の経験者が含まれているが、連続して担当することはなく、年によっては未経験者のみで編成された年もあった。また、担当の事務職員も3～4年で部署の異動が行われるため運営組織の継続性については課題が提起されてきた。平成29年度から学校環境観察実習は学部の教育実習指導委員会の管轄となり、運営委員長には教育実習指導委員会の副委員長が充てられ、実習内容や実習期間等について教育実習指導委員会の中で議論されることとなった。諸課題について継続的に議論されるとともに、これまでは異なる委員会による

運営により生じていた情報共有等の遅延についても今後は解消されと考えられる。

6. おわりに

鹿児島県の人口動態を見ると、鹿児島市への一極集中という人口の地域格差が顕著であり、市以外の地域では多くの学校の小規模化が進んでいる。そのため、複式学級を含む小規模校での指導力の育成は、離島・へき地に留まらず、更にその重要性を増してくると予想される。また、奄美少年自然の家での宿泊学習は、豊かな自然の中で行われる体験活動や集団生活を通じて、協調性の涵養はもとより、教師に求められる様々な資質能力を身に付ける機会となる。これらを総じると、学校環境観察実習は教員養成課程の早い段階で、教師としての広い視野と地域に根ざした実践力の基礎を培う貴重な時間といえよう。

今後は、これまでの諸成果を継承しながら、奄美の実習校および関係諸機関と連携を密にするとともに、より効果的なカリキュラムの構築を進める中で、本実習の更なる充実が図られることを期待したい。

参考文献

- 鹿児島大学教育学部 (2008) 平成 19 年度教員養成学部フレンドシップ事業報告書 奄美大島における体験学習
- 鹿児島大学教育学部 (2009) 平成 20 年度教員養成学部フレンドシップ事業報告書 奄美大島における体験学習
- 鹿児島大学教育学部 (2011) 平成 22 年度教員養成学部フレンドシップ事業報告書 奄美大島における体験学習
- 鹿児島大学教育学部 (2012) 平成 23 年度教員養成学部フレンドシップ事業報告書 奄美大島における体験学習
- 鹿児島大学教育学部 (2013) 平成 24 年度教員養成学部フレンドシップ事業報告書 奄美大島における体験学習
- 鹿児島大学教育学部 (2014) 平成 25 年度教員養成学部フレンドシップ事業報告書 奄美大島における体験学習
- 鹿児島大学教育学部 (2015) 平成 26 年度学校環境観察実習報告書 奄美大島における体験学習
- 鹿児島大学教育学部 (2016) 平成 27 年度学校環境観察実習 奄美大島における体験学習
- 鹿児島大学教育学部 (2017) 平成 28 年度学校環境観察実習 奄美大島における体験学習
- 文部科学省 (2015) これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～ (答申)
- http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm (2017 年 9 月 8 日確認)